



から生き物が示す多彩な時間の世界を意味付けする科学的方法が開発されているのではないだろうか。

多様性は研究対象だけでなく、研究をする側あるいは研究成果を受け取る側の問題でもある。現代は30年前とは比べものにならない速度／効率／規模で情報の授受が行われているが、この傾向は今後も加速するだろう。たとえ同じ観測結果（データ）を前にしても、科学的、疑似科学的、メルヘンチックな解釈（意味付け）が多様な情報源から人々に広くストレートに伝達される。メルヘンの世界も豊かな人間社会に貢献するが、実害が生じるような深刻な場合は問題となってしまう。『形を読む』で初めて使われた『馬鹿の壁』は、伝達可能な情報が受け手の問題（壁）で伝達不能になることを表す。時間生物学に限ったことではないが、30年後も多彩な『壁』に研究者も社会も悩むことになりそうだが、研究者が独占しない科学の広がりには大いに期待している。

